

# HOKKAIDO

PROFILES

# ARCHITECTS の横顔

vol.01

今号の建築家



小西彦仁

HIKOHITO KONISHI

02



菅沼秀樹

HIDEKI SUGANUMA

04



櫻井百子

MOMOKO SAKURAI

06



眞壁喜男

YOSHIO MAKABE

08



米花智紀

TOMONORI YONEHANA

10

告知 12

近況ニュース 16

## 強い憧れといい勘違いに導かれて



国際的な建築アワードで多数の高評価を受け、国内外のクライアントを引きつける小西彦仁さん。その源には若い時分の宿命めいた出会いと経験がうかがえる。

### 小西彦仁

Hikohito Konishi

ヒココニシアーキテクチャ (株) CEO  
JIA 登録建築家 / 2002年入会  
北海道支部長 (2021-)

#### 略歴

1964年 広尾町生まれ。1986年 北海道東海大学芸術工学部卒業。1986年 (株)石井和紘建築研究所入所。1988年 鈴木エドワード建築設計事務所(株)入所。1996年 (有)ヒココニシ設計事務所設立。2016年 ヒココニシアーキテクチャ(株)に改組。受賞等：1990年 SDレビュー入選、2002年 日本建築家協会北海道支部住宅部会ハルニレ賞、2009年 バルバラ・カボキン国際建築賞最優秀賞、他多数

### 始まりは“ダバダ〜♪”

「違いがわかる男の〜」のフレーズでお馴染みのテレビCMに映る空間でコーヒーを飲む男性、そして「建築家、清家清」のナレーション。小学高学年の小西少年はそのCMを見て父親に「建築家って何？」と訊いた。建物を設計する人だと知って、ハッとした。その後、テレビで毛綱毅曠設計の『半住器』を見て「これ家？」と感動。さらに安藤忠雄設計の『住吉の長屋』もテレビで見て面白と感じた。家は三角屋根という固定観念が崩れると同時に「建築っていいな」との思いが湧き上がる。その思いは続き、建築を学ぶことになったのは言うまでもない。

高校後は北海道東海大学(旭川)に進学した。当時の学部長、高田秀三さんがあの清家清さんと同級生だと知った。入学後のキャンパスでは安藤忠雄展が開かれていた。各界で活躍する人物が講師となる「現代文明論」ではあの毛綱毅曠さんの話を聴けた…と、関心を持った建築家や関連する事柄に次々と遭遇。生のスケッチなども見てカッコいいと思い、自分の選択は「間違っていなかった」と確信。そして「現代文明論」では六角鬼丈さん、石井和紘さんなど当時注目の若手建築

家もやってきた。小西さんは彼らのアテンド担当だったことから、企画からアポ取り、当日の対応まで直に関わった。

### ワクワクの経験で心地よい勘違い

特に石井さんは大きなインパクトをもたらした。石井さんが

大学に来たのは小西さんが3年生後期の時。アテンド中に進路を聞かれ、大学院の話もあったが、「僕のところにきた方がいいよ」と言われ、冬休みに石井和紘建築研究所のオープンデスクに行くことに。その後も大学が休みの度に行き、なんと石井さんの自邸『捨庵』に泊まっていたそう。大学での対応などからマネジメント力を見込まれ、卒業と同時に入所。新入りは3ヶ月の寿命というほど厳しかったが、小西さんはクリアした。

そして、何よりも貴重な機会に恵まれた。石井事務所には磯崎新さん

など国内外の有名建築家がしばしば訪れた。泊りがけで建築家仲間が集うこともよくあり、小西さんと同僚の数人はいわば給仕係として帯同した。伊東豊雄さん、山本理顕さん、長谷川逸子さんといった石井さんと年代の近い面々が来る。時には安藤



鈴木エドワードさんの事務所時代。最後の日の撮影だとか。この後すぐに小西さんは札幌に引っ越し、開業(独立)した。左からエドワードさん、当時のチーフ1、チーフ2(現在代表)、秘書、サブチーフ(小西さん)、後輩とのこと



事務所のアプローチに面した窓辺で訪問者の目に触れるよう、ショーウィンドウ的に展示された模型たち

忠雄さん、隈研吾さん、鈴木エドワードさんなども参加。昼はゴルフやテニス、釣りなどを楽しみ、夜にはお酒が入っての建築談義が始まる。今は重鎮の彼らも30~40代で、これからという時分の熱い議論が繰り広げられる。小西さん達所員にとっては、直に聞くが故の学びがありワクワクしたそう。強い憧れを抱くと共に「あ、俺もそう思う」という気づきが心地良い勘違いとなり、自分にもできるという原動力につながったようだ。また、石井さんは建築家仲間の事務所にもよく同行させてくれ、彼らの思考の一端を垣間見ることができた。小西さんは「石井さんは多分、建築家を見せようとしていたんだと思う。みんな、こういう所から上がっていきんだよって」と、振り返る。

そうして1年半を石井さんのもとで過ごしたが、違う環境も見たくなり、鈴木エドワード建築設計事務所に移った。多くの物件を担当し、約8年勤務した。その間も第一線の建築家や同業仲間と交流を持ち、多様な建築観に触れた。その豊かな経験は、後のモチベーションにつながったことだろう。

### 自ら切り拓く

小西さんは32歳の時に独立した。東京暮らしも10年となっていたが、とどまる必要性を感じず、白地図の上を行こうと考えた。当時の心境を「エドワード作品のないところに投下しよう、自分で切り拓きたかった」と語る。投下先を故郷の北海道に決め、住んだことはないが多くの人口を背景に便のいい札幌にした。退所時にエドワードさんは「これからはライバルだからね」、そして「下請けはするな」と言った。

最初の3年間は苦しかったが、しがらみのない地で自分を信じ、師匠の言葉を守って自らのクライアントを掴んだ。寒冷地の仕様を学びつつ、住宅から始めてさまざまなジャンルの建築を手がけてきた。作風は一人の建築家の仕事とは思えないほど多様だ。「周りの環境と内外においてどういう関係で成立するか」をテーマにしなが、「一つしかない場所に唯一の建築の依頼が来るのだから、同じわけがないというのが僕の思想なんです」と言う。その柔軟とも言える多種多様さに望みをかけてくるクライアントも多いとか。しかし、そろそろその路線から「だんだん収束していけばいいかな」と思っているのだそう。

一方、最近の小西さんの活躍で見逃せないのは、海外の建築アワードでの相次ぐ受賞だろう。自分の建築がどの位置にあるのかを知りたく、2009年から応募を始めたと言う。出せば何かしらの手応えがあり、「ああ、この建築は間違っていないんだな。世界から見てもいいんだな」と確認になっているのだそう。

独立から25年が過ぎ、国内のみならず海外のクライアントからの依頼も増え、白地図はカラフルに塗り進められている。最初はアウェー感のあった北海道の建築家界にもすっかり馴染み、今や中心的な建築家の一人となった。現在はJIA北海道支部長として、社会のために建築で可能なことに関心を寄せ、道内の建築文化を盛り上げようと尽力している。



2009年、愛国農場の家(上/2007年竣工/撮影：Hiroyuki Sudo)でバルバラ・カボキン国際建築賞(イタリア)に応募して最優秀賞受賞。ここから海外の建築アワードでの快進撃が始まった。その後もスペイン、ドイツ、アメリカ、イギリス、韓国等でさまざまな建築作品が評価を受ける。直近では2022年、真心庵 天眞(下/2020年竣工/撮影：酒井広司)がIDAデザインアワード(アメリカ)で金賞

## ちょっとずつ上書きをしながらつないでいく



2016年からアトリエバンクの社長に就任した菅沼秀樹さん。  
現在は設計業務から離れてマネジメント業に徹している。  
その目線の先にあることとは。

### 菅沼秀樹

Hideki Suganuma

(株)アトリエバンク代表取締役社長  
JIA 登録建築家 / 2004年入会  
北海道支部幹事長 (2021-)

#### 略歴

1971年 静岡県生まれ。1994年 北海道大学工学部建築工学科卒業、1996年 北海道大学大学院工学研究科修士課程建築工学専攻修了、(株)アトリエバンク入社。受賞等：2016年 公共建築賞優秀賞「函館市縄文文化交流センター」、2020年 公共建築賞優秀賞「北海道札幌視覚支援学校」

### 行くなら遠くへ

菅沼さんは大学受験で初めて北海道に来た。「行くなら遠くにしたかった」と言う。北海道大学に入り、伝統ある美術部「黒百合会」に所属し、造形作品を好んで制作していた。教養課程後の進路は美術と縁のある建築を選んだ。設計を志望して卒業設計に力を入れた。設計を目指すなら大学院に行かないと難しいと聞いて、修士課程へ進むことに。いくつかのコンペにも挑戦した。就職は北海道外でも良かったが、札幌のアトリエバンク(以下、BNK)への入所が決まり、念願の設計の仕事に就いた。BNKが創設25周年の頃だった。

### 公営住宅を大量に担当

BNKには、「建築作品を作り、いずれは独立をするような人たちが集まっていて、いつか自分も何かしら作って雑誌に載せるようなことをしないとイケないだろう」と思いながら設計の仕事に向き合っていたそう。一方で、人には適性があって全員がアーキテクト系ではないとも言う。そのような中、菅沼さんが多く担当したのは公営住宅(以下、公住)だった。

BNKの数ある公共建築の実績の中でも多くを占めるのが公住。その第1号は1980年とのこと。それまで道内で大量に供給された標準設計のブロック造平家ではないものが求められるようになってきた時代。BNKでは、道の住宅課の人たちと共に仕組みの構築をするようなところから取り組み、新たなスタ

イルを生み出してきた。会社としては先が見える仕事であり、誰でも1回は経験する業務で、菅沼さんは大量の公住の設計に携わる。BNKは現在までに約180の公住を設計しているが、その内50団地を担当しているとか。もちろん、その他の建物の設計も手がけてきた。

### 社長になる

ひたすら設計をしていた菅沼さんに最大の転機がくる。入社20年、45歳でBNKの社長になったのだ。



事務所内にて。誰よりBNKの建築の理解者でもある



所員時代に設計を担当した代表作。①釧路町遠矢団地(2006年竣工)②伊達市(旧大滝村)ほのぼの団地(2004年竣工)③北見市高栄団地(2000年～2022年現在も建替中)④新ひだか町本町団地(2007年竣工)⑤道住芦別市ふれあい団地(2008年竣工)⑥伊達市にれの木団地(2006年竣工)

BNKは1970年に秋山孝さん、後藤達也さん、濱田暁生さん(北海道大学卒の同期生)が札幌でアトリエ事務所として創設。営業や経営といったマネジメント業務を秋山さんが、設計・デザインといったアーキテクト業務を後藤さんが担うという体制をとり、その後の世代でもマネジメント&アーキテクト体制は引き継がれてきた。会社として3度目の新陳代謝の時期となった2016年、マネジメント後継者として菅沼さんに白羽の矢があたった。「アーキテクトのつもりでできたけど…」と感じつつも、マネジメントの人は意外に少なく、自分が引き受けるしかない。年齢的に早い気もしたが、秋山さんたち先輩から「やるなら早いほうがいい」と言われた。その一方で、後藤さんたちアーキテクトからは「もう設計をやらないということでもいいのか」、しかし「中途半端にやるのは良くない」との声もあり、マネジメントに徹することを決意。いい建築をつくるための環境を作るというスタンスで経営者としての歩みを始めた。

いわゆる同族ではない企業。資産もないサラリーマン社長にはものすごいリスクがある。そしてやったことのない経営。わからないことが多い中、独自の視点で経営の勉強をはじめ、同業他社との比較や経営状況の分析をしながら取り組んでいる。そして、「社員に決算や業績の公開をしています」と言う。独立した人たちが苦戦するのは営業だとか。以前は、アーキテクトは純粋に設計だけをして、営業や経営に触れる環境になかったから。それを変えて、経営感覚を若い人にも共有

してもらおう機会を作っている。そこには、将来誰かに会社を引き継いでもらわないといけないという思いもある。

これまでBNKは三十数名の組織を、その時々に必要な改編をしつつ保ってきている。その規模が意思決定や全体を見渡すのにちょうどいいスケールのように。菅沼社長は、「ちょっとずつ上書きをしながら事務所を続けていく」と言いながら、50周年を迎えた会社を全力で率い、つないでいる。

### つなぐのは会社だけではない

その一方で、JIAの人材と彼らの実績をつなぐことにも思いを巡らしている。「待たないしなのは、ベテランの人たちをちゃんとつなげるみたいなこと」と話す。後継者がいない場合に会社をたたむのは仕方ないことだが、ベテランの方々には実績だけでなく、何より素晴らしいお客さんがいる。その貴重な仕事をJIAのメンバーで受け継がないだろうか。先輩方に可愛がってもらって仕事を引き継ぐことも考えられるが、大規模の建物ならコンペ方式でチャンスを作るとか、その仕組み作りができないか。さらには、建築士事務所協会の仕事もしているが、「この業界で一番しないとならないのは設計料を上げること。これが全ての根本」と言い、その改善へ向けた野望も抱く。

社長になって5年が経過した今、会社のマネジメントに奔走しながらも、先人の功績を次の世代へ渡すこと、そして業界の発展へと意識が広がっている。

## “なんて素敵なんだろう”を強い想いで実現



いまや環境建築家と称される櫻井百子さん。  
住宅設計をメインに多数の声がかかる。  
多忙を極める中、設計に対する想いや取り組みをうかがった。

### 櫻井百子 Momoko Sakurai

アトリエ momo 主宰  
JIA 登録建築家 / 2011 年入会  
北海道支部環境委員会リーダー (2021-)

**略歴**  
1973年 旭川市生まれ。1996年 北海道東海大学 芸術工学部建築学科卒業。(有)ランデザイン入社。1997年 平尾建築事務所入所。2005年 フリーランス。2008年アトリエ momo 設立。受賞等：2010年 北海道赤レンガ建築賞 奨励賞、2012年 第12回 JIA 環境建築賞 優秀賞 (住宅部門)、2013年 第8回木の建築賞、いずれも「下川町環境共生型モデル住宅美桑」

### 住宅の設計をしたい

「建築設計って家族の大事な、しかも喜ばしいタイミングに立ちあえる仕事なんだ。なんて素敵なんだろう」。

櫻井さんは北海道東海大学(旭川)の学生時、豊嶋守さんの事務所(画工房)でオープンデスクを体験した際に見せてもらった竣工間近の住宅で、建主さんが嬉しそうにする姿を見て、そう思った。そして「住宅の設計をしたい!と強く思った」と言う。

しかし卒業時は就職氷河期。設計事務所への就職は叶わず、

都市計画事務所で契約社員をしながら機会をうかがった。回り回って平尾建築事務所(主宰:平尾稔幸)の紹介を受けるも、すぐには採用されず、建築家が集う場に平尾さんに同行させてもらうなど、機会あらば顔を出すうちにその時がきた。入所間もなく現場(監理)に行かされ、もまれながらも実務を覚えた。約10年の勤務後、フリーランスを経て2008年に独立した。

### 下川の先進的モデル住宅がデビュー作

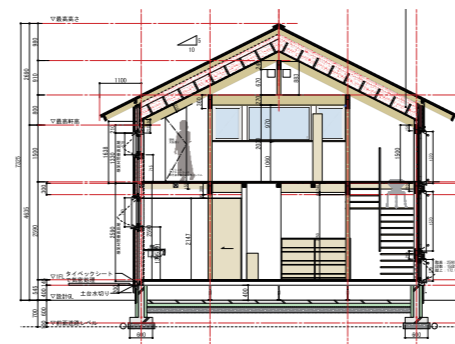
ある時、明日が応募締め切りというプロポーザルを知る。それが、後に櫻井さんのデビュー作にして代表作となる『下川町環境共生型モデル住宅美桑』の設計プロポーザルだった。

以前から建築環境に関心があり、ドイツの先進事例を視察するエコツアーに参加して、気候の似ている北海道で可能なこと



下川町環境共生型モデル住宅美桑。環境省の「21世紀環境共生型住宅のモデル整備による建設促進事業」のもと、2010年完成(左/撮影:KEN五島)。映画『リスタート』(監督:品川ヒロシ、2021年)の舞台としても使用された(右)。いわゆる300ミリ断熱を採用しているが、以降は250ミリ程度が多いそう

がいっぱいあるとの想いを抱いていた。プロポーザル前の勉強会で、下川町の歴史や循環型森林経営など町の取り組みを知り感動。説明する担当者の下川愛にも感銘を受け、プロポーザルでは「下川のショールームみたいな建物にしないといけない」との想いとドイツで見て「こんなことできたらいいな」と思っていたことを詰め込んだ提案で見事勝利した。ただ、求められる環境性能は先進レベル。実作での経験はなかった。そこで、実際の設計でサポートしてくれたのが、“環境性能の鬼”とも言われた建築家の小室雅伸さん、建築環境分野の研究者である福島明さん、そして大学時代の恩師・大野仰一先生だった。仕様や計画面など全面バックアップしてくれた。そうして完成したモデル住宅は、JIA 環境建築賞優秀賞(住宅部門)などを複数受賞。その後の櫻井建築の基礎になったのは言うまでもない。しかし、このモデル住宅ほどのハイスペックを可能とする予算が



「みどり野きた住まいるヴィレッジ」の一連の住宅は共通の断面構成を採用(左)。「てまひまくらし」をテーマに複数棟が実現。中央は2018年竣工の1棟目内観(撮影:佐々木育弥)、右は2020年竣工の2棟目外観(写真:リブラン提供)。外装やサッシまわりの取り合いなども共通とすることで省力化。ヴィレッジ外で同仕様を希望する声もあるとか



一般住宅にはない。そこで、次の住宅を設計する中で先輩建築家にも相談しながら、自分なりの落とし所をつかんだ。

### 次の転機は南幌のプロジェクト

次第に仕事が増える中、次の大きな転機になったのは JIA 北海道支部が主催者を担う南幌町での官民連携事業「みどり野きた住まいるヴィレッジ」の設計事業者になったことだ。1棟目のモデルハウスで空知の武部建設(施工事業者)とタッグを組み、何棟か手がけないと元は取れないという共通認識で3棟を見据え、断面構成を統一するなどできるだけ合理的な手法で挑んだ。モデルハウスが大好評で早々と売却。注文住宅方式のフェーズでも同タッグは続き、目標の3棟を超えた。

この経験から設計の仕方と工務店を決めるタイミングが変わったそう。「武部さんと実施設計を一緒にしてきて、そのスタイルがいいと思ったんです。以前は実施設計後に施工の相見積

をとっていたけれど、道内でやる気と技術力のある工務店さんは相見積を喜びません」と話す。基本設計の段階で建主さんにも工務店と接する機会を作り、一緒に決めた工務店で概算を出し、調整しながら共に実施設計をする。工務店に使用したい材料や長期優良住宅認定などの相談もしやすくしていいのだとか。

### 住宅を中心に広がる活動の領域

現在は95%が住宅設計の仕事だと言う。レベルの高い断熱仕様や換気の質問をしてくる建主さんも増えているそう。

その一方で現在、櫻井さんは JIA 北海道支部の環境委員会リーダーで、全国の環境会議メンバーと活動する機会も多く、国交省関連のパンフレットの作成に関わったりもした。「断熱気密」においては北海道がリードしてきたが、今や国による省エネ基準も北海道での取り組みを凌ぐほど高いものが検討されるまで

になっている。「私たちが頑張らないと、北海道の専売特許と思っていた断熱気密があつという間に追いつかれ追い越されていきます」と危惧する。全国的に大きな波がきており、出遅れるようなことは避けたいところ。そして「バリアフリーが当たり前になったように、建築環境的なこともあえて“環境”と言わなくても標準となるようになればいいです」とも言う。

他にも数年前から下川近隣の工務店と札幌の建築家が手を組み地域住宅を提案する「森とイエ」プロジェクトへの参加や、缶詰工場の設計依頼が入るなど、活動の領域は広がっている。多数の物件を抱え、「仕事から仕事がつながり、独立から10年程が経った頃からいろいろと声をかけてもらえるようになりました。昔まいた種の芽がやっと出てきたと思います」と話す姿からは、多忙な様子が伝わってくる。さまざまな活動に取り組みながら、建主さん、工務店と共に信頼感と尊重し合える関係を大事にして設計に向き合っている。

## 設計をするということ、形になることが楽しい



釧路エリアで建築家の足跡を広げる眞壁喜男さん。  
思い切った独立から30年が過ぎ、「奇跡の連続だ」と言う。  
その所以には、何より設計を楽しむ姿があった。

### 眞壁喜男

Yoshio Makabe

くりえいと創 主宰  
JIA 登録建築家 / 2000年入会  
北海道支部道東地区会グループリーダー  
(2017-)

#### 略歴

1958年 釧路市生まれ。1977年 北海道立釧路工業高等学校建築科卒業。デザイン事務所、設計事務所勤務。1990年 くりえいと創開設。受賞等：1992・1993年 スーパーCADグランプリ入選、1996・2010年 釧路市都市景観賞奨励賞(作品受賞)、1997年 日本建築士事務所協会連合会建築作品表彰入選、2009年 日本建築大賞・日本建築家協会優秀建築選入選

#### ものづくりと建築の原風景

眞壁さんが建築の道を目指したきっかけには、子供の頃の原風景がある。小学生の時に建設ラッシュで、近所に次々と住宅が建つ中で目にした、大工さんの鉋をかける姿や家がどんどんと出来上がっていく光景だ。「何かを作るって面白い」との思いが心に刻まれ、同時に建築への興味も芽生えた。それらが結びついて工業高校の建築科に進むことに。設計課題に取り組む際、参考書として職員室にあった『新建築』などの専門誌を借りることができた。そこで宮脇檀さんの建築作品に惹かれ、建築家の存在を知った。さらに設計を学ぶには大学へ行ったほうがいいと思い、札幌の東海大学へ進学。大学は楽しかったと言うが、高校時に基礎的なことを学んだこともあり、途中でやめてしまった。そして早々と実務の世界に入ったのだそう。

設計の実務を覚えたのは地元釧路の設計事務所。約10年間、公共建築物の設計をはじめ建築会社の確認代願など、あらゆる仕事を経験した。さらに構造設計事務所でもアルバイトをしていたと言う。収入面を補うためだったが、「伏図も構造詳細図も描いた。なかなかすごいことをやっていたよ」と、確実にスキルアップにつながり、構造的なセンスも磨かれたよう。ただ、住宅の仕事のチャンスはなかった。

#### 建主さんと直接の仕事がしたい

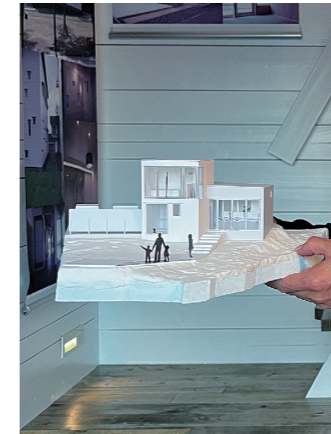
一通りの経験を積んだが、如何せん収入が低い。そこで独立

を考えるようになる。最悪アルバイトでもどうにかなると思い、何の保障もないまま32歳の時に自分の設計事務所を開いた。もちろん直接の設計依頼などすぐに来るわけもなく、他の事務所の手伝いなどで凌いでいた。工務店から確認代願の仕事も来たが、建主さんと直接やりとりしたかったのが、そういう仕事は避けたく正当な報酬を請求したら来なくなったとか。友人の工務店経営者に「生意気だな」と言われたが、ある時「建主を紹介するけど、どうだろうか」との話がきた。求められるデザインやスペックなどへの専門的な対応を必要とする建主で、直接

ホロロの空と海(右写真2点/2009年竣工/撮影:眞壁喜男)。鶴居村で約300坪の敷地に建つ家族3人のために設計したILDK+ロフトの20坪の住宅。最終的には薪ストーブの追加や外構を含めて少し予算をオーバーしたが、眞壁さんの実績の中でも一二を争うローコスト建築。面積以上に広がりある空間、水盤(左)の効果など、小さいながらも豊かな住まい



Double・Nickel(右:外観/2015年改築/撮影:眞壁喜男)。事務所(右隣)の隣地に建つ築40年の住宅を減築してギャラリー兼倉庫に生まれ変わらせた。内部には多数の模型や資料を展示。左の模型は釧路の海が見下ろせる高台に計画された東京在住の建主の別荘。地元の建築家がいいとアプローチしてきたそう



設計ができるチャンスだった。そして、その完成した住宅を見た方から問い合わせがきた。そうして次の仕事につながった。

#### 特定のスタイルは意識していない

眞壁さんが設計をする際に心がけていることは、建主さんとたくさん話をし、そんなにお金をかけないような建物にすること。そして特定のスタイルを意識してはいないと言う。あるとしたら「建主さんの話をちゃんと聞いて、何回も打ち合わせとエスキスをしている中で見えてくるもの」だ。

依頼主はほとんどが釧路や道東地域の方(札幌などでも数棟を手がけているが釧路由縁の方が多い)で、「明るくて暖かい家」を希望されることが圧倒的に多いそう。また釧路は、夏は25℃前後の気温、冬はもちろん寒さが厳しいが日照は比較的ある地域。そういったことから、20年程前から住宅は敷地区画ラインに正対せず南に向けて作るようになったのだそう。そして必然的に南面に大きく開口をとり、太陽光(熱)をダイレクトに取り入れる設計となる。もちろん開口部は熱損失が大きいので断熱性能



には注意を払う。そうやって作ると、大抵は前面道路に対して振れた格好となる。結果的に個性的な佇まいとなり、「どここのあの家を見て、素敵なので話を聞きたい」という感じで、新たな建主さんから連絡がくるケースが結構あるのだとか。

一方、「お金をかけない」という点で特に思い出深い住宅は、『ホロロの空と海』だと言う。広い敷地に「1,000万で家が出来ますか?」と聞かれ、快諾。「若気の至りでできるって答えた。俺、できないって言えないから」と、内心穏やかではなかったよう。経験値から20坪×50万=1,000万と計算。シンプルな形状の平屋で南面に連続大開口をとり外皮をきちんと作って(断熱、日射遮蔽など)、内部をロフト付きワンルーム仕様としたことと仕上でコスト調整した。さらに南面の開口部前に水盤を設け、水面の反射光が室内を照らし、夏は涼を得ると言う仕掛けもした。この住宅は日本建築家協会優秀建築選に選ばれた。

#### 50年を目指して住宅を作っていきたい

眞壁さんの事務所は2020年に30年を迎えた。記念の展示会を開催して(釧路市障害学習センターまなぼと幣舞)、多数の住宅模型を展示した。それらは今、事務所と隣の中古住宅を減築したギャラリー兼倉庫に並ぶ。これまで住宅はもちろん公共の建物や牛舎まで多数を手がけ、釧路を歩けば眞壁建築に出くわすほどだ。住宅は2022年に100件に達すると言う。「奇跡の連続だ、30年も続くなんで」と言いつつも「次は50年かな」と笑顔で話す。現在、眞壁さんと若手所員の計3名で物件によっては社内コンペ的な競争もしながら、複数の案件が動いている。東京在住の方の釧路の別荘や、土地が見つかったらお願いしたいという待機組もいると言う。

「設計するということ自体が楽しいでしょ。形になるんだからね」と言う表情には、かつてのものづくりに目覚めた子供のような無邪気さが漂う。そして、「とにかく住宅を一つ一つ作っていきなさい」と、先の未来へ眼差しを向けていた。

## 実証、検証、そしてその先にある変化へ



2012年、自らの設計事務所を夫婦で設立した米花智紀さん。  
若手ながらも、大小さまざまな設計事務所で経験を積んできた。  
その思考や作風は現在進行形で発展中だ。

### 米花智紀

Tomonori Yonehana

(株)米花建築製作所 代表取締役  
2018年入会  
北海道支部広報委員(2021-)

#### 略歴

1980年 小樽市生まれ。2006年 北海道室蘭工業大学大学院博士前期課程建設工学専攻修了。2006年 A.L.X.入所。2009年 (株)佐藤総合計画勤務。2012年 (株)大林組勤務、米花真弓と共に米花建築製作所設立。受賞等：2014年 SDレビュー2014 入選「wood palace」、2017年 第34回NICHIBA SIDING AWARD 2017 入賞「掘立柱の家」、等

### 自分の基盤を作る

30代半ばまでに、いわゆるアトリエ系、組織系、さらにゼネコン設計部も経験してきた米花さん。「それはすごく面白かったです。やり方が全然違うので」とこやかに話す。

そんな米花さんが建築を学んだのは室蘭工業大学で、出身研究室は昨今勢いのある若手の排出が目覚ましい山田深先生率いる「山田研」だ。「ベースは全部、山田先生で成り立っている」と言うほど教えの影響は大きく、建築の面白さに魅せられてしまったよう。学部卒業で実務をしたかったが、「山田先生に、就職をしてすぐに実務を学べるけど、考える時間ってないよ。自分の基盤となることを固めるのが院の時代だみたいなことを言われました」と、恩師の助言の通り大学院に進学した。論文のテーマは「光の構成論」。主室に開口部からどんな光がどの方向から入るか(大きさや透明性など)について図式化して類型化させる内容だったとか。ここで自分と向き合う時間を持てたことは、後の建築家人生に役立つこととなった。

### 修行に邁進

大学院後は、東京のアトリエ事務所を目指した。学生時から東京に住むお姉さんの家に転がり込んでオープンデスクに挑戦。注目していた伊東豊雄さんの事務所(伊東豊雄建築設計事務所)出身である佐藤光彦さんの事務所(佐藤光彦建築設計事務所)に学生時代から2~3年出入りした。スタディ模型を作っては落とさ

れ、また作る、の繰り返しで厳しくもあったが「毎日エスキスを受けられるみたい。よかったかな」と。一方で、重要なコンペへの取り組みにも触れられた。また、隣接する西沢大良さんの事務所(西沢大良建築設計事務所)とスタッフ同士の交流があり、別の刺激も受けた。このような経験は東京に拠点のない北海道の学生にはなかなかできないので、就職して一人暮らしをしてからは、積極的に後輩を泊めてオープンデスクに行かせた。ポロアパートの一部屋(6畳)に3~4人という時もあり、貧乏な若手芸人のような生活だったが、楽しかったと振り返る。

最初の就職はアトリエで、三幣順一さんの事務所、A.L.X.に3年勤めた。仕事はかなりきつかったと聞け、住宅4件程と集合住宅1件の設計実務を経験できたそう。もう少し規模の大きい仕事をしたいと組織事務所の佐藤総合計画に転職。そこでも3年程勤めた後、北海道に帰って大手ゼネコンの大林組の設計部で寒冷地の仕様を覚えながら4年働いた。前後して妻で仕事のパートナーである真弓さんと自身の事務所を設立。東京での独立も考えたが、もう土地がないなど仕事の可能性に乏しく、同世代の人達が地元に戻って独立すると話していた同様に考えたこと、真弓さんが札幌に住み、ナカヤマアーキテクツで勤務経験があったことから、札幌を拠点にしたそう。

### さて、何を作るのか…

そうして本格的な独立を果たしたが、いざ自身で設計に向き

掘立柱の家(右:外観)。力強い印象の丸太柱がアウトフレームとなっており、その内部を住空間に、外側がルーバーを設けた半外部空間のテラス・外部通路(左)となっている(2016年竣工/撮影:佐々木育弥)

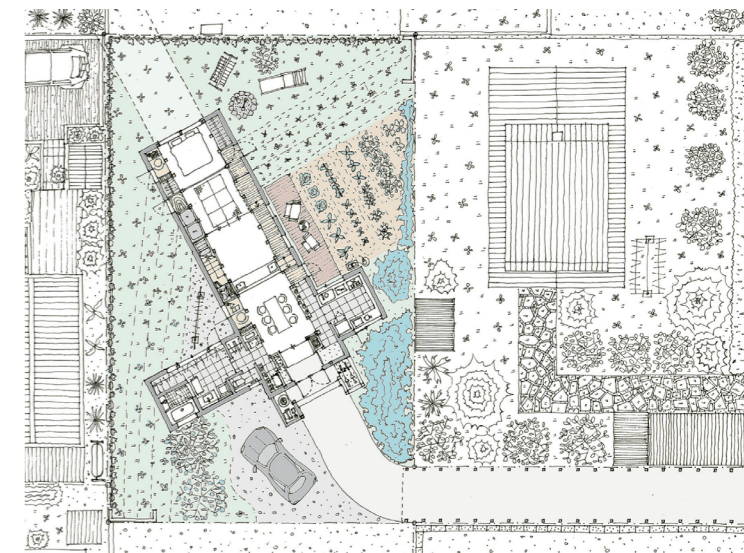


合うと「俺、何作るのかな」と自問。修行時代は実務で手一杯で考える暇がなかった。ここで、かつての恩師の助言が効いてくる。「大学院で考えたことを今やりたい。というか、そこから始まっちゃう」と。実は大学院の後に3ヶ月程インドを一周した。そこで見たイスラムの建物を形作るメッカへの強い方向性と列柱の形式に光だけが射す様や、列柱の秩序によって空間が作られているのがとても綺麗だった。院生時の「光の構成論」とインドで見た形式、好きな建築家の建物からも読み取れる形式性、これらへの気づきが後の思考につながっていく。

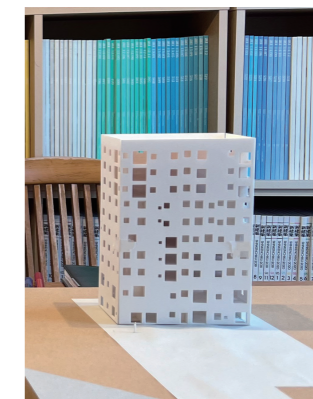
実作1号となった「掘立柱の家」では、北海道開拓により山林を切り拓いた土地であることから、当時の風景のような大きな丸太が並ぶという発想でスタディを始め、力強く並んだ丸太柱につられて住空間が展開するような住宅となった。「旗竿敷地のプラットフォーム」は、旗竿敷地に対して日陰や隣家の窓などいろいろな要素を図式・可視化して、導き出された部分を旗竿につながらる道的空間と見立て、それに付属するようなボリュームを作り、910グリッドの列柱空間とした。「敷地とかを分析する中で現れる形式みたいなものを強く出したとは思っていますね」と話す一方で、結果的に丸太や列柱によって場ができ、それに寄り添って住人が生活している状況を確認して、形式を強く出したことがどうなるかを検証しているとも言う。

その後は複数の福祉施設の設計に取り組み、その一つでは「外部と内部をうまく作りたい」と、開口部の設け方に形式性を模索。また別の案件では「輪になって住もう」をコンセプトに障害を持つ方々が暮らす施設の設計を進めている。

手がける建築の規模も大きくなってきた。自分のオリジナリティは何かを常に意識しつつ、これまでは大学で考えていたことの実証を、これからはその検証を行い、その先で変化させたいとも考えている。「まずは作ってみて。多分すごく変わっていくと思う、作風も(笑)」と、現在進行形で次のフェーズへ向かっている。



旗竿敷地のプラットフォーム(2019年竣工)。道的な列柱の住空間はオープンな構成で、住まい手の持ち物が表出することで、かえって形式が強調されているとのこと



福祉施設2案件の模型。左は市街地を計画地とした10階建てのクリニック・薬局・住まいなどからなる複合施設のスタディ模型で、開口部の作り方とプランの変化などを検討。右は農村地帯で障害を持つ方々が暮らす施設で、いろいろな場のあるレイヤー化した空間を計画

## 北海道の建築展 2022

—受け継がれて進む地域性を見つめて—

「北海道の建築展 2022」を今秋、芸術の森美術館にて開催いたします。

今回の展覧会は「企画展」と「JIA 会員展」の二部構成となります。企画展は磯達雄氏がキュレーションを、会員展は植田暁氏がコーディネートを行います。

また、本展に先駆けて、本展の周知・告知をするためにチ・カ・ホで模型展示等を行う「建築展告知展示イベント」も開催いたします。建築家が建築文化を牽引していることを社会に示す絶好の機会となる本展。展示方法も今までにない企画を考えています。

### 会期・会場

#### 建築展告知展示イベント(告知展)

会期：2022年9月16日(金)PM - 9月19日(月)AM(4日間)

会場：札幌市地下歩行空間「チ・カ・ホ」ドオリ広場東

#### 北海道の建築展 2022(本展)

会期：2022年9月23日(金) - 10月19日(月)(18日間)

会場：札幌芸術の森美術館

### 告知展

#### 建築展告知展示イベント

参加建築家の模型の展示／参加建築家の映像／本展の告知映像



過去の北海道建築展の様子(2015年/チ・カ・ホ)

### 本展 第一部「企画展」

#### 受け継がれて進む地域性を見つめて

キュレーション：磯 達雄氏

原野を切り開いて建てられた開拓地の建物、その発展で生まれた計画都市、そこで人々が厳しい冬でも快適に暮らすための環境技術。北海道の建築は、地域性から多大な影響を受けるとともに、新たな地域性を想像しながら進んできた。過去から未来へとつながる北海道の建築の流れをこの建築展では一望する。

### 本展 第二部「JIA会員展」

#### 風景に働きかける建築の魅力

コーディネート：植田 暁氏

世界を魅了する北海道の地で設計するとき、私たちは広い風景と知らずのうちに対話しはじめ、歴史や地勢の豊かさを評価し直し、未来につながる建築を構想します。それこそ、これまでは当たり前のように思われていた北海道の建築家に共通する作家性であり、北海道建築の特徴であり魅力といえましょう。「北海道の建築展2022」第2部では風景に働きかけてきた北海道の建築を紹介します。

### イベント(予定)

講演会(磯達雄、植田暁)／キタコブシ賞紹介(第5回受賞者表彰・講演)／第3回JIA北海道建築大賞二次審査・授賞式／JIA部会シリーズのセミナー(地域会、環境部会、住宅部会)／出展者による展示説明(映像)／ワークショップ／等

※現在、建築展グループ(実行委員会)では建築展に向けた会議を開催し、企画作業を進めているところです。4月末時点での予定をお知らせいたします。



磯 達雄氏  
建築ジャーナリスト  
Office Bunga



植田 暁氏  
建築家  
NPO法人 景観ネットワーク



2015年のイベントの様子



過去の北海道建築展の様子(2015年/チ・カ・ホ)



主催：(公社)日本建築家協会北海道支部  
共催：(公社)日本建築家協会北海道支部 法人協力会  
お問い合わせ：(公社)日本建築家協会北海道支部事務局  
tel.011-788-7491

## 生き続けるモダニズム建築展

—Timeless Modern Architecture—

20世紀、産業と技術の高度化を背景に、建築の領域でも近代的な美学を追い求めた多くの建築家がありました。

彼らの建築は一般に「機能主義」「合理主義」といった切り口で語られますが、優れたモダニズム建築には、建築家の個性的建築観や感性が色濃く投影されています。

これらの建築の中には、歳月を経て、老朽化や社会的要求との乖離を理由に姿を消すものもあります。

一方、「構造的な改修」や「機能の更新」を施すことにより、元来の空間的な質と空間的魅力を保ちつつ再生される事例も少なくありません。

循環型社会の構築に向けて、優れた建築ストックの形成が重要課題となっている今、時代を超えて生き続ける国内外のモダニズム建築を紹介します。

「生き続けるモダニズム建築」展 実行委員会

委員長／大矢二郎

### 会期・会場

会期：2022年6月3日(金) - 7月3日(日)

会場：中原二郎記念旭川市彫刻美術館ステーションギャラリー

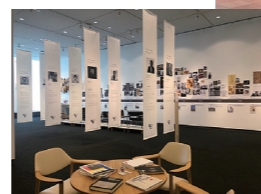
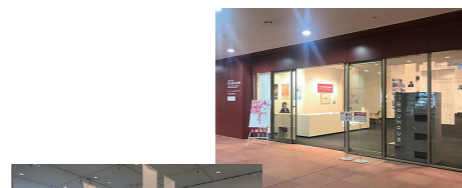
(旭川市宮下通8丁目3番1号/JR旭川駅内・東/tel.0166-46-6277)

開館時間 10:30-18:30(入館は18:15まで/月曜休館)

入館無料



鎌倉文華館 鶴岡ミュージアム



会場のイメージ  
(2019年「パウハウスと旭川」展の様子)

### 展示

#### 3つの物語

第1章 生き続けるモダニズム建築

第2章 わたしたちのイチオシ！モダニズム建築

第3章 旭川の未来を市民のみなさんと描く

### トークイベント

#### 生き続けるモダニズム建築

6月11日(土) 13:30～(参加無料、申し込み不要)

#### 旭川赤レンガ市庁舎の軌跡と未来

6月25日(土) 13:30～(参加無料、申し込み不要)

旭川赤レンガ市庁舎の軌跡と未来(改訂版)



主催：(公社)日本建築家協会北海道支部 旭川地区会、中原二郎記念旭川市彫刻美術館

協力：(公社)日本建築家協会北海道支部 道東地区会、(公社)日本建築家協会北海道支部 函館地区会、建築模型製作所ブロック・エム

協賛：(一社)北海道建築士会 旭川支部、(一社)北海道建築士事務所協会 旭川支部

後援：(一社)DOCOMOMO Japan、旭川家具工業共同組合、北海道新聞旭川支社、北のまち新聞社「あさひかわ新聞」、旭川ケーブルテレビ株式会社「ポテト」

お問い合わせ：tel.090-7519-6923(石田)

## 第3回

## JIA 北海道支部 建築大賞 2022

※下記は4月末時点の募集要項より要点を抜粋したものです。応募方法など詳しくは、最新の募集要項をご覧ください。JIA北海道支部のホームページにてご確認ください。https://www.jia-hok.org

JIA 北海道支部では、北海道の地域文化や建築文化の発展に対する意識の高揚を図ることを目的とし、北海道の新たな建築文化に寄与する建築作品や活動に対して、「JIA 北海道建築大賞 2022」を授与いたします。

3年毎に開催している本アワードは、今回で3回目を迎えます。設計者のみなさんより多くの新たな建築文化に寄与する作品の応募をお待ちしています。

### スケジュール

【登録期間】2022年5月9日(月)～2022年5月30日(月)

(応募資格：応募作品の設計者/応募料：1点につき3万円[JIA会員以外は5万円])

【作品提出期間】2022年7月4日(月)～2022年8月8日(月)

(A1パネルをJPG形式[6932×9839ピクセル程度・120MB程度]で、CD-Rに書き込んで送付)

【1・2次審査】2022年10月8日(土)

(1次審査：公開投票/2次審査：公開審査「北海道の建築展2022」会期中を予定)

【現地審査】2022年11月7日頃～11月21日頃

【審査結果通知】2022年12月6日(火)

(大賞1作品、優秀賞、奨励賞)

【表彰】2023年1月12日(木) JIA 新年交礼会にて表彰予定

### 対象作品

- ① 作品は2019年9月～2022年5月までに竣工したものの。
- ② 確認申請が必要なものは検査済証の写しを提出すること
- ③ 北海道に造られた作品に限る
- ④ 過去に受賞した作品、雑誌等に発表した作品でも良い
- ⑤ 現地審査が可能な建物
- ⑥ 応募点数は自由
- ⑦ 審査員の関与した作品は応募できない
- ⑧ 応募はJIA 会員資格を問わない

### 審査委員

#### 審査委員長

飯田 善彦 氏  
株式会社飯田善彦建築工房

#### 審査委員

米田 浩志 氏  
北海学園大学工学部建築学科 教授

#### 審査委員

高木 伸哉 氏  
株式会社フリックスタジオ



2016年大賞作品『ときわの家』鈴木理



2019年大賞作品『北見市立留辺薬小学校』菅原秀見・岩村友恵

主催：(公社)日本建築家協会北海道支部

お問い合わせ：(公社)日本建築家協会北海道支部事務局 E-mail: info@jia-hok.org

## 近況ニュース

### 協力会役員・専門委員会議を開催

去る2021年11月26日、緊急事態宣言解除を受け、約1年半ぶりに協力会役員・専門委員会議を行いました。主に2022年度の事業について協議いたしました。会議後は、昨年JIA役員を卒業された棚橋さんと佐々木さんを送る会も兼ねて、意見交換会を着席スタイルで行いました。小西支部長、赤坂副支部長、菅沼幹事長、協力会OBの平松元幹事長にもご参加いただき、思い出話に花を咲かせました。長くJIAの活動を支えてくださったお二人に感謝するとともに、JIAという場が、様々な出会いを築いてきたと感じられる、暖かい会となりました。感染予防に十分留意しつつ、2022年もJIA北海道支部の価値や絆を強化したいと願っております。

(協力会総務委員長：ピーエス株式会社 弘田七重)



参加者の集合写真

### 第5回 北海鋼機デザインアワード 開催・結果

新型コロナウイルス感染症の影響によって、当初予定から1年延期して開催となった第5回北海鋼機デザインアワード。感染対策を行いながら、第一次審査を2021年10月13日、第二次審査(現地審査)を11月3日(火)～4日(水)に行い、賞が決定しました。

最優秀賞(1作品) 各賞 作品名/設計者

○mother's+ (マザーズプラス) / 横尾淳一 [写真①]

優秀賞(3作品)

○厚真の家 / 照井康穂 [写真②]

○PREMIUM SHOP HUSQVARNA SAPPORO / 鈴木 理 [写真③]

○夕張市拠点複合施設 りすた / 村國 健・尾辻自然・山脇克彦 [写真④]

入賞(3作品)

○KDDI エボルバ Polaris\_Sapporo / 中里嘉亨・垣田 淳・丸林 哲

○北海道立北の森づくり専門学院 / 遠藤謙一良

○大きなテラスのある家 / 堀部 太



### 2022年新年交礼会を開催

去る2022年1月13日、札幌グランドホテルにて新年交礼会を行いました。対面のイベント開催は2020年の同会以来、約2年ぶりでしたが、改めて直接顔を合わせることができる良さを実感する会となりました。

### 事務所移転のお知らせ

この度、北海道支部事務局は下記へ移転しました。

新事務所

〒060-0806 札幌市北区北6条西6丁目2番地 設計会館701号室  
電話番号:011-788-7491 FAX:011-788-7470

## HOKKAIDO ARCHITECTS の横顔 vol.01

発行日 2022年5月10日

発行人 小西彦仁

発行所 公益社団法人 日本建築家協会 北海道支部  
〒060-0806 札幌市北区北6条西6丁目2番地 設計会館701号室  
TEL.011-788-7491 FAX.011-788-7470  
URL.http://www.jia-hok.org/

編集人 石塚和彦 [広報委員会]

制作協力 登尾末佳(編集制作)  
山崎一平(デザイン)